

天がなくなるまで目ざめず、
また、その眠りから起きない。

- 14:1 女から生まれた人間は、日が短く、
心がかき乱されることでいっぱいです。
- 14:2 花のように咲き出では切り取られ、
影のように飛び去ってとどまりません。
- 14:3 あなたはこのような者にさえ、
あなたの目を開き、
私をご自身とともに、
さばきの座に連れて行かれるのですか。
- 14:4 だれが、きよい物を
汚れた物から出せましょう。
だれひとり、できません。
- 14:5 もし、彼の日数が限られ、
その月の数もあなたが決めておられ、
越えることのできない限界を、
あなたが定めておられるなら、
- 14:6 彼から目をそらして、
かまわないでください。
そうすれば、彼は日雇人のように
自分の日を楽しむでしょう。
- 14:7 木には望みがある。
たとい切られても、また芽を出し、
その若枝は絶えることがない。
- 14:8 たとい、その根が地中で老い、
その根株が土の中で枯れても、
- 14:9 水分に出会うと芽をふき、
苗木のように枝を出す。
- 14:10 しかし、人間は死ぬと、
倒れたきりだ。
人は、息絶えると、どこにいるか。
- 14:11 水は海から消え去り、
川は干上がり、かれる。
- 14:12 人は伏して起き上がらず、

ヨブは苦しさの中で、人間のはかなさに心が傾いてゆきます。短い人生であり、人は息絶えるとすべてが無くなってしまうという感覚です。木には望みがあるが人にはないと主張します。そのように、自分の苦しみゆえ人間存在の意味が薄らいでゆくことがあります。恐らく、“死にたい” “生きてても意味がない” という思いになる人もいることでしょう。

しかしそれは彼の結論ではありません。このような絶望は、主によるすばらしい回復へのプロセスなのです。どうにもならない落ち込みのときは、主がそばにいてくださり、すでに回復が始まっていることを知りましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

